――物語

氷まくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
　――物語

【Ｎコード】
Ｎ４３９１Ｖ

【作者名】
　氷まくら

【あらすじ】
　忍野の廃墟に出入りする人間、つまり、怪異の相談事を持ってくるのは阿良々木暦だけではなかった。
私立直江津（くずれ）高校三年生桐原崩。
ゴールデンウィークを境に怪異の世界へと引きずり込まれた彼がたどる、ちょっぴりファンタジーでシリアスな、語られなかったはずの物語。

‡

今書いている作品の主人公をそのまま使った作品です。知っている方は「お前かよ」みたいな感じでお願いします。

やよいバード其の一（前書き）

どうも、氷まくらです。

思いついて、衝動で書いてしまいました。

すみません。

目を止めてくださった皆様には感謝です。

お詫びに、イオンで氷まくらの小説を読んだと言えば、買い物金額から５％ＯＦＦになります。

嘘です。すいません。

稚拙な文章力ですが、最後まで読んでいただけると幸いです。

やよいバード其の一

００１

青春って言葉は、常にもてはやされる。ありたいていの、端から見ればたいして重要でもない出来事が、人生におけるその区間内でだけ特別の意味を持つ。「青春してるねぇ」とか「若いねぇ」とか、『青春』に対しての多種多様な、だけれどどれもプラスである評価は、耳にしたことがないというと嘘になるだろう。

そしてそうやって、

大人たちは、常に僕たちを傍観し、

世界は、常に僕たちを苛（さいな）ませる。

理解不能。
無理難題。
荒唐無稽で魑魅魍魎（ちみもうりょう）とした、

誰も答えの出せない問題に、

答えなど、端からない問題に、

消えてしまうような儚い問題に、

世界を巻き込まない小さな問題に、

僕たちの視界が捉える、全ての世界で、

不恰好な解答を要求する。

模範解答もないままで。

採点者さえいない中で。

当たれる相手がいるのならば、何が『大人への準備期間』だ、と僕は憤慨するに違いない。

じゃあ、大人って何だ？

厳しさを知ることか。

間違いに媚び諂うことか。

諦めを、知ることなのか。

それが大人なら、それが正解なら、

大人になんて成りたくない。

こっちから願い下げだ。

という、僕の独白は黒歴史にして、

今から『青春』に対しての探究とやらなんとやらを話そうと思う。

例えば、

鳥と空を飛んだり

鯱とプールで泳いだり

狐と騙し討ちをしたり

蜘蛛と殺し合う。

そんな小さな事の中から、

世界の何億分の一にも満たない出来事の中から、

僕の答えを導きだそうと思う。

きっと陳腐な解答が、奈良の大仏みたく鎮座しているに違いない。
そして、遠回りした僕らはきっと、
腐りきった僕らはきっと、
振り返って必ずこう呟く。
『青春におかしなことはつきものだ』

‡

午後五時三十三分四十二秒。
いや、時報ではなくて。何も知らせないから。
人にはそれぞれ、忘れられない時間が必ずある。
例えば、
愛しい我が子が生まれた瞬間。

例えば、

大切な誰かが亡くなった瞬間。

例えば、

９．１１テロ事件の発生時刻。

例えば、

原子爆弾の投下された日時等。

あまりにも人々の心に深く根ざす出来事があれば、普段ならさほど気にしないことでさえ、気にならないことでさえ、はっきりと覚えてしまう。

『彼女』の泣き顔とか。

宙に浮く、涙の数とか。

流れに乗って思わず口走ってしまった上の二つは……忘れてほしいけれど、結構大切だったりするんだよな、ストーリー的に。

「あのー、すいません」

澪標市立病院の五階、中央に位置するナースセンターには、ベテランナースから初々しいナースまでが勢揃いしている。

僕の呼びかけに反応したのは、ベテランナースだった。

いや別に落胆はしていない。

僕の質問に、彼女は快く答える。反発精神が殆ど皆無である僕は、マクドナルド顔負けの営業スマイルでその言う通りにするのが当然の帰結であって、ナースステーション脇から伸びる廊下を、靴音を鳴らしながら歩いていく。

澪標市立病院は、おそらく市内では一番の医療施設だろう。入院したことはないけれど、外見然り対応然り、できる匂いを漂わせている。内装も病院らしい清潔感がより洗練されていて、変な話、居心地がいいとさえ思ってしまうほどだ。

「けれど、こいつにはとてもじゃないけどもったいないな」

そう呟いて、僕は足を止めた。

五〇二号室。

ネームプレートには嫌な奴の名前。

大きく一度、ため息をついて扉を開ける。

あいつは、いつもと同じようにいやらしく笑っていた。

「おっ、桐原君。見舞いに来てくれたのかい」

驚くほど白が似合わない。もとい、こいつには廃墟が一番似合うのかもしれないな、と一人で納得してしまう。

出迎えたのは、右足を骨折した忍野メメだった。

「お前の強制でな、忍野」

憎まれ口を叩くほどひねくれてはいないが、こいつを前にするとこうなってしまうのが自然の摂理って言う奴だ。

自然の摂理も随分と粋な奴だ。

ハイタッチしたい。強く握手したい。

「はっはっはー、これも『ツケ』だよ。君が僕に払うべき『ツケ』がこういう少しずつの小さなことで、確かに減ってはいくんだ。なんなら僕に感謝して欲しいぐらいだね」

「自分の乗っている積み上げた机を忍に蹴られて、そこから落ちて右足骨折したやつがよく言うよ」

正直な話、自分で落ちたとかなら納得は言ったものの、まさか忍が一枚噛んでいるとは予想外だった。忍とは、忍野と一緒にいる金髪の少女のことだ。『吸血鬼のなれの果て』らしいその少女は、ゴールデンウィークを境に忍野のいる廃墟に住むようになったらしいが、まぁ僕は赤の他人のため、面識こそはあるけれど事情は全く知らない。

それにしても……ゴールデンウィーク…ねぇ……。

「いやー、痛い所をつくよなぁ、桐原君は」と忍野はただ苦笑いしかできなかった。

頼まれてた下着と服、と手短に内容を挙げて、忍野の寝ているベッドのそばにある机にそれを置く。「うん、ありがと」と声が聞こえて、僕はそれを確認の上横から椅子を引っ張り出し、座った。

窓が後ろにある。

五階にある窓だ。

ここからでも、落ちれば死ぬんだろうな。

「、何だい？　桐原君。僕はてっきり、君を業務連絡だけですぐ帰ってしまうような冷酷非情な人間だと思っていたんだけれど」

「酷い言いようだよ、まったく」

「ははは、いやー、なんだかさー、君がとっても面白そうな顔をしているからさー」

平然と嘘をつきやがる。

真逆である嘘にたっぷりの皮肉を添えて。

フランス料理店で出してそうだな。

ま、オープンセレモニーが閉店セールになるだろう、間違いなく。

「あれ、桐原君。君の制服のシャツの端」
忍野は指差す。

「血が、飛び散ってるよ」

「……そういや、そうかもな。もしかしたら、赤いインクかもしれない」

「確かにそうだ。うんうん、僕も毎日そういうことばかり考えてしまうのはよくないねぇ。入院中なんだから、僕もたまにはゆっくりするべきだよね、まったく。んー、それにしても桐原君」
忍野は矢継ぎ早に、静かに核心へと忍び寄る。

「外、騒がしいねぇ」

五階の窓から、朱色に染まっていく空を、
赤い絵の具をぶちまけた、
もしかしたら『赤い血をぶちまいた』ような空を、

いやらしく一瞥して、忍野は言う。

「ははは―。いつも以上に死んだような顔して、君の言う『赤いインク』を飛ばした服を着て、外の騒ぎにはどこ吹く風の、上の空で一辺倒」

忍野は、ただ

当たり前のように言い放った。

「桐原君、何か良いことでもあったのかい？」

記憶がフラッシュバックを起こす。

ゴールデンウィークの時と、何も変わらないこいつの言葉。

僕はこいつが大嫌いだ。

『蜘蛛』と同じくらい大嫌いだ。

殺したくてたまらない。

だから僕は、それだから僕は、ゴールデンウィークのあのとき、
その問いかけに、答えなかった。
でもそれが災いして僕になるなら、
もしあのとき、忍野に答えていたら、
何かが変わっていたのだろうか。
そんなことを考えて、僕は忍野の目を見る。
吸い込まれそうになった。
まるで、

病院の屋上から地面へ落下するように。
その痛みを、感じて
僕と、照らし合わせて
気付けば、僕は口を開いていた。
本当に、いつから僕は
こんな偽善者になったのだろう。

‡

人にはそれぞれ、忘れられない時間がある。

あまりにも人々の心に深く根ざす出来事があれば、普段ならさほど気にしないことでさえ、気にならないことでさえ、はっきりと覚えてしまう。

とても悲しそうな顔で、焦点の合わないその瞳で僕を見て、彼女は僕の前にいた。

僕の世界に、彼女は反転して落ちてきた。

宙に浮かぶ涙の数は七つ。

白い患者服が風を切って、激しくなびく。

グチャッ、と

何かが潰れるような音がして、

赤い赤い、血が飛び散る。
地面は、夕日よりも赤く染まる。
そして、僕は、彼女が落ちてきた上空を見上げて出遭った。
病棟の上空でけたたましく鳴く、
一匹の怪鳥に。
これが、
僕と橋姫弥生が初めて逢った日の
午後五時三十三分四十二秒の出来事だ。

やよいバード其の一（後書き）

見切り発車のため続くかわからない……

でも一応、『やよいバード』だけは終わらせたいと思いますので、

よろしければ、これからも見てくださいね。

やよいバード其の二（前書き）

どうも氷まくらです。

今回は、意外にも早く次話が出せました。

でも、やよいバードなのにまだ弥生が出てこない……

きっと次には出しますので。

今回は少し、思わせぶりな過去と原作との絡みです。

最後までどうぞお付き合いください。

やよいバード其の二

橋姫弥生

私立直江津高校生。

出席番号三十一番。

身長、羽川ぐらい。

体重、知らないでいいとの忠告。

高校一年生、二年生の時の成績、言い分なしの好成績。素行ともに問題なし。

長い黒髪を、よく中央で折り返してまとめていた。

教師からも生徒からも人気があったという。

交友関係は良好。

活発で、元気な少女だったらしい。

それこそ、まるで鳥のように。

森の中でさえずる、愛らしい鳥のように。

その綺麗な翼をはためかせ、

空を飛んでいたらしい。

そして、誰もがそんな彼女を羨望の眼差しで見ていた。

彼女の飛ぶ空を仰いで、憧れた。

けれど、

いつからだろうか。

その空がもうなくなってしまったのは。

鳥が飛ばなくなってしまったのは。

彼女がいなくなってしまったのは。

高校三年生の彼女の容姿。

不明。

高校三年生の彼女の成績。

不明。

高校三年生の彼女の交友関係。

不明。

高校三年生の彼女の情報。

不明。

‡

「え？　橋姫さんのこと？」

僕の横を歩く羽川が、語尾に優しく疑問符をつけて答える。眼鏡から覗く、その可愛い瞳（め）は確実に僕を捉えていて、その瞳には僕に対する普段からの彼女の優しさが見て取れるが、若干の疑問と不思議も多少映えていた。

「うん、出来ればもっと。何でもいいからさ」

僕はできるだけマイルドな言い方でお願いをする。「そうだね……」と僕の質問に了承した羽川は考えるようなポーズをして、足を止めた。

学校帰りとあって、学生の声が辺りに響いている。僕とクラス委員長の羽川翼は、一匹狼や群れを成している学生が通学路にまばらに散っている中の、その一つだった。しかし、私立直江津高校のカリキュラムはどれも学年別に違う。今年から受験生である僕たち高校三年生は、一番帰りが遅いというのは当たり前であって、道にいる

学生とは言っても数は乏しく、部活帰りの下級生か、同級生が専らだ。

「珍しいね。桐原君が興味を持つなんて。橋姫さんって出席番号三十一番でしょ？桐原君だと、桐原崩で八番だから、近くもないし、むしろ遠いくらいなのに」

「僕の興味が行き届く範囲を、出席番号の近さで決まるなんて悲しい事にするな。最低でもクラス単位だろ。井の中の蛙、大海を知らずどころか、琵琶湖さえ知らない大騒ぎだ」

というか、まさかこんな形でフルネーム紹介になるとは思わなかった。まぁ、桐原って二人いるから無理もないけれど。

「じゃあ、どうして桐原君は橋姫さんのことを私に聞いたのかな？面識はないんでしょ？」

「ないと言えば……ないでいいかな」

とてもじゃないが、病院の屋上から転落してきたなんて言えない。

「ほら、橋姫ってクラスでいつも休んでるだろ？　それに変わった名前だからちょっと気になってさ。確か羽川は、一年二年と同じクラスだったはずだから」

「橋姫って確か、『源氏物語』宇治十帖の一つ目の名前だね。本で読んだけれど、あまり芳しい話ではなかったわ」

「へぇー、さすが羽川。何でも知ってるな」

「何でもは知らないわよ。知ってることだけ」

彼女は決まってこう笑うが、さて、本当に知らないことがあるのだろうかと思うときがたまにある。というか、いつも余す所なく思わせていただいてます。

「でも合点いったわ。だから学校帰りに、私に『一緒に帰らないか』って声をかけたんだね」
「もしかして、迷惑だったか？」
「ううん、嬉しいくらい。いつも一人だから」
「偶然、僕もいつも一人だし」

そう言えば、羽川とは同じ帰り道だが一度も帰ったことがなかった。当の本人は、よく副級長の、確か阿良々木だったか、と残ることが多いし、僕も僕で他人と帰るようなキャラじゃない。もちろん、『高嶺の花過ぎて近寄れない』みたいな羽川キャラとは全く別の方向性だ。

「あ、羽川」
「何？」
「お前ってココア好きなの？　たまに学校で飲んでる所を見かけるけれど」
「うん、好きかな」
「んじゃ」

歩いている途中、すぐそばにあった自販機に僕は向き直す。あまりにも自然な流れであったため、羽川は最初、僕の行動に気がつかなかったようだ。羽川が、僕が自販機で飲み物を買ったことに気付いたころには、自販機がお釣りと缶ジュースを吐き出していた。

「はい、情報代としてココア」少し目が点になっている羽川の手に、僕は缶ココアを落とす。もう一度向き直って、次は自分の飲む物を買おうとしたとき、「あ、桐原君」と慌てて僕を制したのは羽川だった。

「何だ？」
「帰宅中の買い食いは禁止だよ」
「そんな堅苦しいこと言うなよ。守ってるやつなんて、その言い分から察して羽川、お前の一人以外、誰もいないぞ」
僕の選んだ缶ジュースが、鈍い音を立てて落ちてくるのを待ち構え、左手でやってきた例のブツを手に入れると立ち上がる。
とは言っても、ただのスポーツドリンクだ。
「普段から思ってたけれど、桐原君っていわゆる、『不良』だよね」
「言葉を返させてもらうが、お前と比べて『不良』じゃないやつは、少なくとも学校には一人もいないだろうよ」
「ううん、比べてとかそういうのじゃなくて。桐原君の普段からの行いにはやっぱり、怠ってる部分がたくさんあるよ。買い食いしたり、掃除サボったり、授業中にガム噛んだり、学校休んだり、」
「待て待て待て！！　僕どれだけしょうもない不良なんだよ！？」
「あとね、さっき桐原君の言ってた、『井の中の蛙、大海を知らずどころか、琵琶湖まで知らない大騒ぎだよ』って、やっぱり蛙にとっては琵琶湖って海ぐらい大きいんだから、水たまりか田んぼの畦道ぐらいにしたらどうかな？」
「それ、だいぶ前のセンテンス！！」
もうなんか、大事なハートに罅が入るわ。
「それじゃあ、ココア飲まないのか？」
「うーん、じゃあ桐原君の買い食いを見逃すということで、ココアはもらってあげる」
「もうお好きにどうぞ、羽川さん」

閑話休題、

「橋姫さん、だよね」
通りかかった公園のベンチに座った僕ら。缶を開けてジュースを飲み始めたのは僕だけで、羽川は缶ジュースを握って太ももに置いたまま本題へと話を進めた。
「でも、私が知っていることって少ないと思うよ。それに、そのほとんどは結構有名な話だし」
「僕の無関心さをなめるな、って勝手に助言したのはお前だろ？」
「そういえばそうだったね。えっとね、確かに私は今まで、これからの一年を含めて三年間、橋姫さんと同じクラスだったわ。しゃべったことは少ししかないけれど、とても優しくて当たり障りもないし、元気いっぱいで、部活動は何もやってなかったけれどクラスでは人気があったほうだよ」
「そうか……」彼女を知らないだけに、あまりその事実が頭に浸透しなかった。

思い出すのは、落ちてくる彼女だから。

虚ろで悲しい目をした、彼女だから。

「高校二年生になっても、橋姫さん、とても人気があったわ。成績も文句なしだったから、男女問わず憧れの的だったと思う。でもね、」

でも、

僕の知る『橋姫』へのきっかけは、高校二年生の時だと言う。

「橋姫さん、高校二年生のときに不慮の事故に巻き込まれて……。奇跡的に命は助かったんだけれど、事故の怪我のせいで足が動かなくなってしまったの」喋っている羽川でさえ、憂鬱な雰囲気が漂っていた。

「それからね、どんどん疎遠になっちゃって、最初はクラスのみんなも気にかけていたし、橋姫さんもいつも通り振る舞っていたんだけれど、家庭でも悪いことが重なってしまったようで、すっかり性格も暗くなって、それがきっかけで重い病気にかかってしまったせいで、もう学校にも顔を出さなくなったの。私たちも、大学入試を意識するようになったから、橋姫さんのことを気にする人もどんどんいなくなってしまって……」羽川は、まるで自分が悪いかのように申し訳なく喋る。

お前のせいじゃない。誰のせいでもない、なんて声をかけることができたらかっこいいのであろうが、生憎そういうキャラでもないし、今回で橋姫の事を初めて知った僕が言えることではなかった。

それはともかく、

「なるほどね」

度重なる不幸にやつれた少女。

「出遭う理由はあるわけだ」

「へ、であう？」

「ああ、いや、何でもない」羽川には言わない。面倒事に巻き込むのはできるだけ避けた方がいいだろう。地の底を這うような成績不

信者はともかく、羽川のような勉強のできる生徒は脇目もふらず勉強するべきだ。

「ありがとう、羽川。おかげでこれからの人生、もう興味が湧かなくて済みそうだ」
「何だかひねくれた言い方。いえいえ、どういたしまして」
「それじゃあ、そろそろ帰るか。悪いな時間取らせて」
「ううん、そんなことないよ。私こそこれくらいしか知らないけれど。桐原君は今から用が？」
「ああ、澪標市立病院にちょっとした用事があるけれど、別に時間を気にしないから大丈夫」
「澪標市立病院って、確かこの近くだよね」
「ご存知？」
「うん。小さい頃、入院したことがあってね。入院中はよく、病院の裏庭で本読んだりしてたな」
「ちなみに、いつごろ？」
「んーと、小学三年生ぐらいかな」

おお、アイキャンイマジン本読む羽川小学三年生。

同時に自分の英語力の欠如具合にディサポ……何だっけ。

「あの裏庭にね、少し高い垣根があるの。その向こうには何があるんだろう、って子供の時よく気になって覗こうとしたんだ。それをようやく見れた時は、すごくうれしかったな。澪標市立病院って小高い丘の上にあるからね、その垣根の向こうに、方角も重なってちょうど綺麗に朝日が見えるんだよ」
「へぇー、驚いた。本当に何でも知ってるんだな」
「何でもは知らないわ。知ってることだけ」

羽川は、ふふふ、と笑うだけ。

「ねぇ……桐原君」

だけれど下がり口調で、
不安定な気持ちを目に映し、

「澪標市立病院には、何の用で行くの？」
「友達、と言いたくない奴の面倒見。右足を骨折して入院しててさ。
いっそのこと、もっと酷い目にあって欲しかったぐらい」
「そうなんだ……じゃあ」

そして羽川は、口にした。

「お腹の傷は……大丈夫なんだね」

「……ああ」

一瞬の沈黙が空気を満たした。

小さく頷いて、飲み終えた缶の中身を見る。

蜘蛛のような闇が蠢く、空になった中身を見る。
羽川の言葉は、ゴールデンウィークの時と全く同じだった。
「もちろん、でないと生きてないだろ」
「そうだよね……もう、大丈夫なの？」
「お前はもう知ってるだろ？」
羽川は何も言えずに、口をつぐむ。事の顛末を知っているからこそ、何も言うことができなかったのだ。
「親父は、逮捕された」
僕の淡々とした言葉が、公園に染み渡る。遊具の影が一層伸び上がり、静かに僕を包んでいく。
僕の影は、『蜘蛛』の子のように散らばった。
「ごめんね、桐原君」
「いや、謝らないでくれ。あの時、お前に何も話さないで無視した僕が悪いんだ」できるだけ笑顔で、僕は羽川に答える。
「お前は大丈夫なのか？」
「……うん」
羽川と僕。
似ても似つかない二人の唯一の共通点が、

家が近所であることと、
家庭での不和だった。

そう、あの時。
ゴールデンウィークの初日。
家を飛び出した僕が、同じくそうやって家から出てきた羽川にあったのが最初だ。

「私も…大丈夫だよ」
「そうか……」

羽川は

「うん、大丈夫」

そう答えた。

よいしょ、っと一声でベンチから立ち上がると、僕に向き直り、笑う。

「ごめんね。こんな話しちゃって。橋姫さんの話だったのに」
「いいよ、成り行きなんだから」

頃合いと思い、僕もベンチを立ち上がった。

「今日はありがとう。おかげでクラスの友達と仲良くなれた気がする」

「ひねくれてるって言ってるでしょ」
羽川は笑っていた。
「それじゃあ、桐原君も用事があることだし、これくらいにしとこうか」
「だな」
「うん、それじゃあ。また明日。ココア、いただきます」
「おう」
そうやって笑う羽川を見送った僕は、
ふと、思った。
もしかしたら彼女も、ゴールデンウィークに、怪異に出遭ったのかもしれない。
羽川にも、何かおかしなことがついたのかもしれないと。
ゴールデンウィークのあの時、「あんな家庭、耐えられない」と唇を噛み締め血の滲んだ口で呟いた彼女が、
「ごめんね。こんな話しちゃって」
確かにそう言ったのだ。
「何だろうな」

だから僕は思った。

羽川翼も、きっと何かに行き遭ったと。

ゴールデンウィーク。

僕が『蜘蛛』と行き遭ったように。

‡

「『陰魔羅鬼（おんもらき）』」

忍野は僕が外であったことを話した後、間もおかずにそう呟いた。

「それはきっと、『陰魔羅鬼』だよ。桐原君」ニヤリと小さく笑ってそう答える。

「何だ、そのいかにも古い歴史をなぞったような新手の宗教団体の過激派テロリスト組織みたいな名前は？」
「シークレットテリブルデーモン」
「だれが全米を震撼させろと言った」
それに随分とチープな名前だ。
「ははは。ま、冗談はここらへんで。うん、その怪鳥は『陰魔羅鬼』で間違いないだろうね。仏教で、語りを妨げる意味の『魔羅』に『陰』と『鬼』で怪異を強調して『陰魔羅鬼』。鳥の外観をした怪異で、このケースなら大方こいつだ」
「へぇー、随分と自信があるんだな。その根拠は？」
「中国の古書『清尊録』や江戸時代の『太平百物語』っていう書物には、その怪異の詳細がのっていてね。『陰魔羅鬼』は、死んでしまった人間の気が生まれ変わったものなんだよ。ほら、ここって病院じゃない。人を癒やす医療施設である病院。時には人の最後を看取る病院。死体なんて、ないわけがない」
「……なるほど」
「桐原君の話だと、その橋姫ちゃんは、『陰魔羅鬼』に取り憑かれているのだろうね」
僕はそれを聞き終えて、席を立つ。
「おっと、どうしたんだい？　桐原君」それを引き止めたのは嫌らしく笑う忍野だった。
「別に、帰るんだ」端的に僕は答える。しかしそれでも、忍野の笑みは消えなかった。
「そうだね。確かに、今からさっき飛び降りた橋姫ちゃんと面会するのは無理だしね」

「」

必然的に歩みが止まる。

「何だ、その意味深な発言」僕の殺気立った言葉にも、忍野はどこ吹く風の顔だった。

「意味深だなんて。僕は君がゴールデンウィークに経験したことを生かしていないように見えたから、そう言っただけだよ。近寄らないでいいものに近寄ってしまうのは、馬鹿らしいからね。怪異は意図的に関わるものじゃないんだよ」

「もう、意図的も何もないだろ」

話半分に聞き流して、僕は病室を後にしようとする。

それでも忍野は嫌らしく笑っていた。

「うん、ならいいよ。桐原君の好きにすればいい。僕は意外にも、桐原君はヘマなんてしないと確信しているからね」

「勝手に信じてろ」

僕は扉を開けて外に出る。

出て行く僕を、忍野は見ていた。

「だってそうだろ。その身に怪異を宿す君なら。半分怪異である君なら。怪異を殺したことのある君なら。そして、怪異に魅せられたのではなく、」

少しずつしか狭くならない視界の中で、

忍野は、言った。

「怪異を魅せた、君ならね」

病室の扉が、僕を廊下へと吐き出した。

「うるせぇ」

扉は、もう少し早く閉まるべきだ。

やよいバード其の二（後書き）

やよいバードは次回で完結予定です。

その時のあとがきでは、一話目の語りを含めたあとがきらしいあとがきに挑戦しようと思ってますので、また次回。

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

またぜひ、更新した際は見てくださいね。

やよいバード其の三（前書き）

3ヶ月空いてしまいました……氷まくらですm（＿＿）m

ちょっと猿の惑星に誤って不時着…ほんとすいません忘れてましたm（＿＿）m

待っていてくださった方はすいません。初めての方はどうも、氷まくらです。

今回は、主人公の過去を垣間見る回になってます。バケ風なのが受け入れてもらえると嬉しいです。ぜひ、最初から見てもらえると幸いです。

では、最後までお付き合いください。

やよいバード其の三

０００．９

ああ、そういえば、

この街の景色が一度、輝いて見えたことがある。

雨が降った後も重なったからであろう。地面にできた水たまりから宙に浮かぶ水の滴さえも取り残すことなく、太陽の光がその中で屈折して屈折して屈折して、撹乱反射したような光の線が空気を見透かして輝いていた。僕の住む街が、僕の世界が、とても綺麗で眩しかった。

まるで違う世界に来たようだった。

目から鱗なんてものではないくらい、もう何から何まで、天変地異が起きたように違っていたのを覚えている。

そのとき、初めて知った。

とてつもないくらい感慨深くなった。

あー、僕の世界には

こんな幸せがあったのか。

こうやって生きることができたのか。

悲しんで、
結局一人で、
何も解決できないで、
穴があいた心で、
腹部の抉られた体で、
地面に広がる血だまりの中心で、

死にながら生きていた僕は、

誰にも悟られず本当に死んでいく。

はずだったのに、なぜだろう。
わからない。まったくわからない。
不思議でしょうがない。
神様のおこぼれを頂戴したのか、響きには不服だが、悪くはないから良しとしよう。

「おい、くずれ」

そうそう。そんなとき確か、声がして、

ひょこっと、僕の前の座席から『あいつ』が顔を出すんだ。

「まだなのか〜？」

上づったような、可愛らしい、中学生ぐらいの容姿相応の声。でも身長的に前の席から僕の方へと向くには、背もたれが少し大きいらしい。全身を僕にそのまま方向転換して背もたれに肩ごと乗せて、

重力に任せた腕をダラッと引き下げながら「ふぇ～」としたようなお疲れ気味の顔を僕に見せていた。肩まで伸びた黒髪は、先端が無作為にハネている。これで四百三十歳と言うのだからびっくりだ。といっても、僕はただ苦笑するだけだったけれど。

「何笑ってる？」

さっきまで彼女の肩から垂れているだけだった腕がぐいっと持ち上げられて、僕の頬を彼女の手がつねる。

眼帯をしていない方の目が、可愛い三日月を作った。

「心外だ。私は車酔いという重大疾患者だというのに……人の不幸を笑いやがって」

「わるいわるい」

「あと、どれくらいでつく？」

「もう、次の停留所だよ」

そういって間もなく車内に伝えられるアナウンス。途端に、彼女は顔を輝かせた。

「よし。ではこのボタンは、私が押すよ」

胸を張って、何やら張る意地もないくせに偉そうにしているが、ただ押したいだけだ。

バスから停留所へと降り立った僕たちは、二人揃って背伸びをする。僕は高校生で彼女は見た目中学生だと言うのに、伸びをしている時間は彼女の方が長いし、やけに背中からポキポキという骨の軽快な音が僕よりも連発した。

「うー、固まってるねー」

「年寄りみたいだ」

「と、年寄りをナメるなよ！！」

「そこは自覚している！？」年寄りを否定しないのか。というか、四百三十歳となればおばさんもおばあちゃんも通り越している。

カッとなって、少し赤くなった頬を両手で隠して僕から視線をそらす彼女。おいおい超高齢化をぶっちぎり一位通過の四百三十歳にしては随分と可愛い仕草だな。

「さて、行こう！！」

背伸びを終えた彼女は、そう言って走り出した。午後二時、春だというのにこの日は少し肌寒い。

「お、おい！？　待てよ！」

なのに、あいつは勢いよく走ってる。

馬鹿みたいに騒いで、

本当に馬鹿みたいに騒いで、

全く、もうなんか…

あははっ。

「おい、くずれ」

僕より前を走っていた彼女が、まるで旋回してくるように戻ってきて、傍で僕の名前を呼んだ。

「最近よく笑ってるけれど、何が面白いの？」ムムム、としかめっ

面が僕に向けられる。それが何だか、僕には意外だった。

「あれ、笑ってた？」

「うんうん、さっきからニヤニヤと。ずっと笑ってる。やっぱり私の顔に何かついているんじゃ？」ペタペタと、彼女は顔の彼方此方を手で触って不安げに確認する。いつまでもそうしていられそうなぐらい真剣になっているのだから、僕にとっては面白くなる一方だった。

「ついてない、ついてない」

「一人で笑っているとは、何たる気持ち悪さ」

「無理やりなんかつけるぞこら」

「セクハラ」

ふふふ、と彼女が笑った。

「早く行こう、くずれ」

手が、彼女の手にぎゅっと握られる。ぐっと勢いよく引っ張られて、態勢を崩しながらも足が無理やり走り出した。

「留福亭の大福が、売り切れちゃう！！」

「うわっ！？　あ、危ないって！！」

「ははははは！！」

彼女は笑って、停留所から町へと伸びる緩やかな下り坂を走っていく。この坂から見える街の上には雲一つない。

もう雨が降った後なんて、どこにも見えない。

不幸だった記憶なんて、まぶしい光で消されて見えない。

「大福は逃げないだろ！！ったく、かははは！！」

彼女に手を引かれてようやく気づいた。

やっぱり僕は笑ってるんだ。

ニヤニヤしてひっきりなしに笑っている高校三年生だなんて、おかしな奴だ。気持ち悪い。

だけど、

幸せだなぁ。

本当、幸せだなぁ。

すごい、幸せだなぁ。

ただあいつが居るだけで、

こんなに、幸せなのになぁ。

幸せなのに、

それなのに、

何で…

――何でだろう。

雲一つない空から一滴、雫が落ちてくる。

手で拭って確認したその雫が、僕の記憶を加速させた。

真っ赤な血。

血？

血。

血血。

――どうしてだろう。

ぐらつく脳髄。激痛が頭を貫通する。それなのに僕の手は止まらなくて。僕の手は真っ赤なのに止まらなくて。

――こんなことになるなら、最初から全部拒絶したのに。

動機が激しい息苦しい。眼球が何かを捉える。意味がわからない。広がる血溜まりに、浮かぶ物質。意味がわからない。自分の手にある内蔵器官。ふやけたような細い管がどこからか伸びていて液体を

排出する。意味がわからない。下腹部が火を噴いたように血飛沫が。血飛沫が血飛沫が、えっと血飛沫で顔は洗えたっけ。

———なのにどうして

目の前に広がる、これ何？　意味がわからない。嘘だ消えろ見せるな知らないっていったら知らないわからないこんなこと有り得ないありえるはずがない。嘘だと思ったから。見たくなかったから。全部幻だから、消してしまおうと思ったから。一口目。二口目。三口目で嘔吐。何だこれ、意味がわからない。ベタって、顔に張り付いた。綺麗な黒髪。あ…この匂い。わからないわけがない。いつも僕の傍にいてくれたあいつの……嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないもうやめてくれよぉぉっ！！！

———どうして

食べれなかった頭部が

だっていっぱいあるから。消そうとしても消えない記憶があるから。

その顔は、いつも僕に向かって笑いかけてくれたから。僕が初めて、初めて、……それなのに、

――どうして

『ああ！！！！！！！！！』

――どうして

ぐちゃりと潰れた。

――殺してしまったんだろう。

‡

００３

「うおっ」

ゴトンっと、バスの縦揺れが僕を睡眠から連れ出した。

まだ上手く回らない脳みそで、辺りを把握する。どうやら寝過ごしたわけではなさそうだ。

「それにしても今の揺れはびっくりした」

バスはよく使う方であるが、反対方向のためこの辺りには来たことがない。

がしかし、まさかこんなところに『ちんさむロード』があるとは……早急にハガキで応募だ。８０ちんさむは確実に超えているぞ。

一度欠伸をして、肺に溜まっていた古い空気を吐き出す。

ガラガラの車内、腰を浮かせて、僕は前の席を覗き込んだ。

そこには最初から、誰もいない。

「……だよな」

もう一度、背もたれに全体重を預ける。

外はもう午後五時で夕暮れだ。真っ赤な夕日が地平線から半月の形に見え隠れしている。

血をこぼしたような景観。

胸に残る気持ち悪さを、ぐっと奥へと沈み込ませた。

『次は澪標市立病院前』

車内アナウンスが、こだまする。僕はそれを聞き終え、窓の枠に備え付けられていた下車ボタンを押した。

押そうとする人も、勿論誰もいない。

バスから降りた僕は、改めて深呼吸して、背筋を伸ばす。

小さくポキポキ、と音を立てただけで、感覚的にはすっきりするどころか逆に心地悪くなってしまった。

「なんか、全然上手いことできないな」

ふっと横を、何気なく見てみる。
僕の横には、もう誰もいない。

「……何やってんだか」

自分の行動に呆れて、溜め息をつく。そのまま、僕は目の前に構えている澪標市立病院と対峙した。

別にいいのに。
ほっておけばいいのに。
「ま、関わってしまったらしょうがない」
ポリポリと頭を掻きながら、一人言をぶつぶつと呟く。

鳥に憑かれた、少女。

怪異に苛まれる人間。

「仲間は欲しくないね。一人の方が気楽でいいし」

過去も、そしてこれからも、
僕はきっと――なままだ。
だからこの物語はずっと、――なんだろう。
では、割愛できるぐらいの、僕たちの話を始めよう。

「蜘蛛」

ぼそっと、まるで呪術的に呟いたその一言で、

僕の影は、蜘蛛の子を散らしたように消えていった。

‡

幸い、今日の澪標病院はなかなかの混み具合だ。でも実際、金儲けばっかり考える理事長辺りの奴以外の、勤勉で人を救うことに精を出す高い志の医師の方々にとってみればやはりあるまじき事態であるのだろう。そうは言っても僕たちは人間だ。病気にならないわけがない。

完璧なわけがない。

おかしくならない、わけがない。

まぁ、話を戻してどうして混雑していると都合がいいのかと言うと、理屈は簡単。少しの行動でも、おかしな状態でも、気づかれにくいということだ。

別に悪さをするわけじゃないから。

ご協力お願いします。

「あのー、すいません」僕の呼び声に反応したのは、ベテランの婦長さんだった。

いやいや、だから残念だなとか思ってないって多分おそらく十中三四あれ数おかしくない？

それはともかく、僕は婦長さんに、できるだけナチュラルに切り出した。

「橋姫弥生さんの病室ってどこですか？」

「えっ、」思わず洩らしてしまった感嘆符が若干の沈黙を助長してしまったが、「ええと、ああもしかして、」と婦長さんは僕に尋ねる。

「学校のお友達かな？」

「ええまぁ、そうです」

苦笑で、おおよそ考えられる高校生として最大限の社交的雰囲気を醸し出して答えたが、婦長さんの顔はいまだ暗いままだ。

まずい。当然、今まで一度も音沙汰なしであったいわゆる学校からの使者が突然やってきたのだ。不信がられただろうかと、心の中で顔をこわばらせる。しかし婦長さんから帰ってきた言葉は、彼女の表情とは裏腹なものだった。

「ありがとうね」

「……えっ？」お辞儀までされて言われた思いがけない言葉に、後ろへのけぞりそうな体を一歩先に踏み出した右足でバランスを保ち、不自然さを隠す。

頭を上げた婦長さんの顔は、ギリギリ、お世辞程度に笑っていた。

「彼女、五階から一階に移動してね。そこを少し歩いていけば、中庭の近くにありますよ。また、今日だけじゃなく、時々お見舞いに来てあげて。橋姫さんも、きっと喜ぶと思うわ」

婦長さんはにっこりと微笑んだ。しかしその笑みに、やはり残念というような、一種の悲しみの念がちらついてしまう。

「あ、はい……わかりました」

で、では、とたどたどしくなりながらも、僕はその場を後にした。

「またお見舞いに、か……」

婦長さんの淡い希望に、自分でも最低だと思っているが、薄く笑ってしまう。まさか自分がそんな希望の星であるのかと考えると、やってることは詐欺師の体験実習に早変わりだ。

「それは、無理なんですよね……」

僕は彼女を助けるんじゃない。
自分のために。
怪異を捕食するために、僕は今から橋姫を利用する。
橋姫には、悪いが興味はあまりない。

「んで、」

まぁ、独白を決め込んでかっこつけていたわけではないから、別に邪魔が入った所で怒りはしないのだが。
僕は足を止める。中庭を越した辺りから、橋姫の病室が一目でわかっていた。あまり見たくない奴が、一つのある病室の扉の前で、ニヒルを気取って黄昏ていやがったからだ。

「何でここにお前がいんだよ、忍野」

「や、桐原君」

いつも通りのあの忌々しい笑顔。
ゴールデンウイークから変わらず、こいつが僕に向ける笑顔は、まるで自分の心を読まれているようで、落ち着かないし受けつけない。

「『奇遇だねぇ』じゃ、ないんだろ？」
「勿論、こんな足だって言うのに、わざわざ五階から一階まで降り

て来ないよ」
壁にもたれて、見せびらかすように体位から一歩先行している、ギブスのはめられた右足に視線をやる。

うーん、嘘臭い。
お前にジャーマン・スープレックスをかけてやろうかと心の中で毒を吐く。あ、今気づいたけどジャーマン・スープレックスって足への痛みにかなり関係ねぇ。

「いや、まぁね、どうせ桐原君のことだから、その橋姫ちゃんってこの所に押し寄せて、厨二病電波振り撒いて混乱させちゃうだけだと思うと胸が痛くて痛くて」
「よっしゃ喧嘩だ」

右足骨折とか知らん。
問答無用でジャーマン・スープレックス決めてやる。

というのはさておき。
閑話休題。

「まさか桐原君、自分がただ彼女に取り憑く『陰魔羅鬼(おんもらき)』を喰えばそれで済むなんて思っているんじゃないだろうね」
「え？」
予想通りの僕の反応に、忍野はやれやれと溜め息をついた。
「考えてみなよ、桐原君。陰魔羅鬼は橋姫ちゃんに憑いているんだぜ？　主を覚えた鳥は、獲物を覚えた怪鳥は、もう馬鹿じゃないんだ。おそらく、何かしらの寄生が彼女に埋め込まれているだろう。それを考えずに桐原君が陰魔羅鬼を喰っていたら、橋姫ちゃんもたまったもんじゃないんだよ」
「……あっそ」

言い返せないことも崇って、何だかふてくされた感が出てしまった僕の言葉。しかし実際、僕にとって橋姫なんてどうでもいいっていうのに。
「ああ、橋姫ちゃんって子は桐原君にはどうでもいいんだっけ？」
「心を読むな地文を読むな。これ小説の鉄則だから」

二次小説だけども。
『みんなで作っていこう』が方針だから、この作品。

「ったく、いいから早く、」

「ああ、あと。最後に一つだけ」

鬱陶しくなって、僕がせいで橋姫の病室の扉へ手をかけた時、忍野は嫌らしくもまた僕を止めた。

「何だよ」
「桐原君は、シリーズ小説とか最初から読むタイプ？」
「何だ？……本はあんまり読まない。っていうか、そういうのって最初から読むのが当たり前だろ。話がわからなくなるし」
「そうだよね。だから、だからこそ桐原君。肝に銘じていてほしい。僕たちはそれぐらい、イレギュラーなことをしているとね」

「は？」

違和感。
違和感しかない、忍野の言葉。
まるで何かの兆候。

自分のいるこの道筋に、一瞬の暗雲低迷を思わせる。

「どういう意味だよ？」

「そのままさ。僕たちはね、今回、彼女の進行している物語に勝手に介入しているってことさ。登場人物としての条件を何も満たしていないんだよ」

「さっぱりだ。お得意の悟りでも開いたのか」

「ははは、桐原君。これ以上は何も言わないよ。諌めもしないし、助けもしない。だから、しっかりと覚えておいてくれ」

あの嫌らしい笑み。

「君は、橋姫ちゃんの物語を変えようとしている、ということを」

忍野はそう言い放った。

「……へいへい」

僕はそれを拒絶した。

「もうそういうの、どうでもいいんだよ」

ゴールデンウイーク。

邂逅。

怪異。
彼女。
思い出。
大福。
家族。
恋人。
噂。
事件。
通り魔。
殺人。
殺害。
死亡。

「僕はもう、死んだのだから」

記憶が交錯する頭を無理やり持ち上げて上を見た。真っ白な天井だ。
まるでまっさらのようなその白さ。

全てをなくした、僕と同じだ。

「桐原君自身も、君の物語についても、よく考えたほうがいいよ」

時がゆっくりとなったような錯覚。
そんな中で、本当にたちが悪い。忍野はギリギリ聞こえるぐらいの
声で呟いたのだ。

「それでも君は、生きているのだからさ」

聞こえない。
きこえない。
キコエナイ。
ナニイッテルカワカラナイ。

「もういいから、さっさと行くぞ」

自己暗示をかけて、頭を冷やす。無理やり話題を切って目の前を見た。扉の向こうにある、その怪異を。

僕は、扉を開ける。

おそらく、忍野はそんな僕の後ろ姿を見て、

いつも通り、嫌らしく笑っているに違いなかった。

‡

病室は一人部屋の個室だ。入ったすぐそばには洗面所があって、奥がベッドスペースなのだろう。

「誰？」

透き通った声。
僕らを確かめるその声は、あまりにも細くて、今にも消え入りそうな声だった。

しかし彼女は、こちらを向いていない。

開け放たれた窓。病院特有の異様な白さのカーテンが、夕暮れの肌寒い風に大きく揺れている。

それは、病院の屋上から落下してきた彼女の、風になびく患者服を彷彿させた。

黒くて長い髪の毛。羽川情報通りに折り曲げてはおらず、伸びきって手入れがなされていないため多少荒れている。それでもその髪の毛は、風に揺れて綺麗に輝いていた。窓の外を眺める彼女の顔は、そのせいでこちらからは見えなかった。

「看護婦さんですか？別に呼んでませ、」

「生憎、看護婦さんじゃありません」

その言葉に、彼女が振り向く。
虚ろな目がこちらを向いた。

ああ、僕と同じ目。
これじゃどの目が誰の目かわからなくなるじゃないか。
そうだな、なら。
それならちょうどいい。
全てが終わったら、最後に聞いてみよう。
君が僕と同じなら。
僕と同じ『ーー』なら。
もしかしたら、何か答えてくれるかもしれない。

「どうも」

そんな適当な挨拶が、僕と彼女の出会いを素直に飾った。
だけれど、今の僕は知らない。

僕との出会いが、彼女の物語を終わらせてしまうことになるのを。

やよいバード其の三（後書き）

自分でも考えた以上に話が膨らんできてしまいました。

頑張りますので、またぜひ見てくださいね。

それでは、冷えピタでしたm（＿＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4391v/

――物語

2011年11月14日02時27分発行